健康産業新聞

THE HEALTH INDUSTRY NEWS ©CMPジャパン株式会社 2002

第1010号

発行所 CMPジャパン株式会社
本社 千代田区神田駿河台2-5-3 神田ナリタビル
☎03(5296)1010 FAX03(5296)1010
年間購読料 21,000円（消費税込）
振替口座 00190-1-20633

食品の健康表示
保健機能食品と健康食品
A5判・308頁 定価/3,600円（＋税）
発行/CMPジャパン株式会社 送料400円

人間ドック受診者 280万人中9割近くに異常 「高コレステロール」「肝機能障害」4人に1人

働き盛りの日本人の健康状態は年毎に悪化、肝臓、血糖値、肥満などの検査項目に異常がない健康な人の割合は14.5%、わずか7人に1人しかいないことが、㈳日本病院会予防医学委員会の調査で、明らかになった。この数字は、昨年、全国で成人健診や人間ドックを受診した約276万人の検査結果のうち、生活習慣病とかかわりが深い6項目の分析で、1984年の調査開始以来、最悪の数値だ。検査項目別にみると、前年に引き続き「肝機能異常」が26.6%でトップとなり、以下、「高コレステロール」24.9%、「肥満」20.4%、「腎・膀胱疾患」15.4%と続いている。ただし、男女別にみると傾向に差があり、男性は「肝機能異常」(32.3%)、女性は「高コレステロール」(25.3%)が最も多い。

集計した笹森典雄委員は「男性の異常は過労や飲酒などの生活習慣による影響、女性の異常は加齢による女性ホルモンの減少による影響が大きい」と分析している。

■昨年に続き、男性「肝機能異常」、女性「高コレステロール」がトップ

人間ドック全国集計は、過去最高の276万5762名を対象として行われたもの。①「異常なし」14.5%、②「軽度異常あり、生活改善し経過観察を要す」18.9%、③「医療を要す」30.9%、④「二次精査を要す」48.0%となった。

検査項目別の異常頻度（②～③）でみると、「肝機能異常」が26.6%と昨年に引き続き最も高く、続いて24.9%の「高コレステロール」、さらに「肥満」(20.4%)、「腎・膀胱疾患」(15.4%)、「高中性脂肪」(15.3%)、「高血圧」(14.0%)と上位5位までのランクは昨年と同じ（グラフ参照）。

性別では、男性の場合、最も割合の高いのは昨年同様「肝機能異常」(32.3%)だが、次いで「高コレステロール」(24.7%)、「肥満」(22.6%)と昨年の順位が入れ替わった。さらに「高中性脂肪」(19.4%)、「高血圧」(15.8%)、「腎・膀胱疾患」(14.9%)、「耐糖能異常」(14.3%)の順となった。

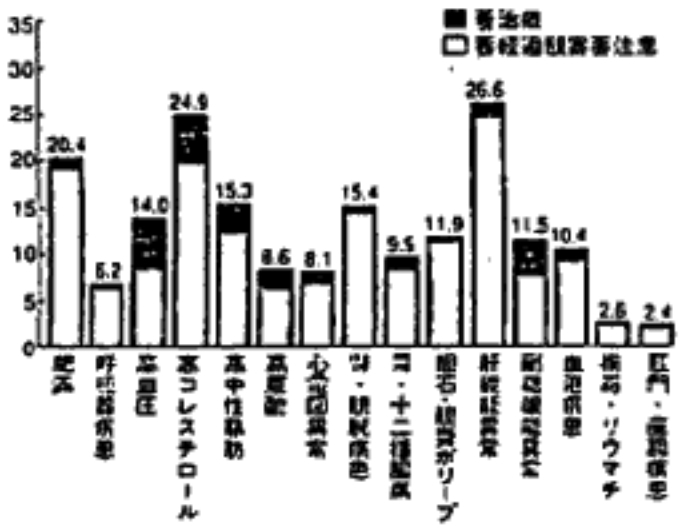
女性の場合、トップは「高コレステロール」で25.3%と4人に1人の割合を占める。次いで「肝機能異常」(16.4%)、「肥満」(16.2%)と続く。僅差とはいえ、昨年2位だった「腎・膀胱疾患」は16.1%で4位に下がった。さらに、「血液疾患」(12.4%)、「高血圧」(10.7%)、「胆石・胆のうポリープ」(9.4%)と続く。

■生活習慣病関連項目、耐糖能異常以外は増加傾向が顕著

ライフスタイルに関連の深い6項目（腎・膀胱疾患を除く）について、年代別の比較を行ってみたところ、肝機能、高中性脂肪は50歳代をピークとして60歳以上は下降傾向を示している。高コレステロールは50歳代以上、肥満は40歳代以上で横ばいで、高血圧と耐糖能異常は加齢と共に上昇傾向を示している。これは前年統計とほぼ同じ傾向にある。

6項目異常頻度を性別に比べてみると、前年とほぼ同じパターンで、高コレステロールは、50歳代以降に女性の異常率が急上昇して男性と逆転。その他の5項目では、各年代共に男性の異常頻度が女性より高くなっている。女性は加齢と共に異常頻度が上昇するが、男性は耐糖能異常と高血圧以外は、いずれも40～50歳代以降は下降傾向を示している。

人間ドック検査項目別異常者頻度（2001年）



■健康医学の確立と人間ドック医療の実践・普及を

このような健康度の悪化に対して、㈳日本病院会・予防医学委員会は、従来から、①生活習慣の欧米化、②専門学会による病態識別値の採用、③人間ドック反復受診者の増加による加齢の影響、④社会環境の悪化――をその要因として挙げていた。が、20世紀の人間ドックを総括した場合、2次予防としてのがん検診は一定の成果をあげることが出来たものの、生活習慣病発症に関係した検査の異常頻度は年々悪化する一方だ。その大きな理由として、同委員会は、「人間ドック受診者自身による生活習慣の改革の失敗」を挙げ、今後健康教育や生活指導を充実させる『健康度アップ戦略』を掲げている。今、21世紀の医療改革は、「治療から予防へ」視点を変えることが提唱されており、厚生労働省は「健康21」の理念として、①壮年期死亡の減少、②健康寿命の延伸――を挙げている。「21世紀の人間ドックは、上記の理念を実証することが主題であり、予防医学から健康医学の確立とその方向に基づいた『人間ドック医療』の実践を普及しなければならない」（同）と結んでいる。

食品開発展10月9日開幕
国際シンポ、セミナーなど申込開始

（関連記事11面）

本号の特集
■食品開発展／注目企業の見どころを紹介!!…11～17面
■ニガウリ／抗糖尿素材として市場に定着…19～21面